

第二章 「困難な私たち」への遡行^{そこう}

——コンタクト・ゾーンにおける暴力の記憶の民族誌記述——

中村 平

はじめに

本章はコンタクト・ゾーンにおける暴力の記憶の民族誌記述とその遡行^{そこう}するものを取り上げる。日本人である筆者は、台湾先住民族とくにタイヤルと名づけられ名乗っている人びとの間でフィールドワークをしており、かれらの植民地統治されてきた記憶と歴史を、筆者みずからの立場性に留意しつつ考えてきた。新聞に取り上げられるようないわゆる大きな政治においては、現在、台湾先住民の民族としての自治と脱植民化（decolonization）が議論されている。同時に日常生活においては、植民地統治に関する断片的なさまざまな記憶が語られる。脱植民化に関して、大きな政治がともすれば民族主体を立ち上げる力のベクトルを有することに対し、日常で語られる記憶はそれを後押ししつつもずらすような力のベクトルを持っている。

断片的記憶はナショナルな力をずらし続けることにより、記憶を話し、聞き書き、そして読む者の間に、ナショナルでも基盤主義的（後述）でもないある関係性を、記憶の分有という行為の結果生み出す。植民地統治というコンタクト・ゾーンにおける記憶の民族誌記述は、そのような関係性——「困難な私たち」への遡行（後述）を行う。

そうした記憶が語り継がれ、読み書きされ、そして遡行^{そこう}するプロセスにおいて、植民地統治に関する原初責任を取り續けていく「私たち」が固定されない形で登場する。脱植民化はこの遡行的プロセスこそ設定されうる。本章は台湾先住民族、特に筆者が聞き書きを行っているタイヤル民族をとりまく脱植民化の運動を、民族誌的な記述によって描かれるフィールドあるいはコンタクト・ゾーンにおいての応答という形をとって考察するものである。まずこれらの鍵となる概念を説明し、その後に台湾山地の具体状況に分け入っていきたい。暴力の記憶は読者と分有されることになる。

1 「困難な私たち」への遡行^{そこう}

（1）「困難な私たち」

困難な私たちとは、「一切の根拠を拒否しながらも、遡行的に記述し続ける中でつむぎ出そうとする関係性」『富山二〇〇二：三二一』を指す。ジェテイス・ベトラー『一九九九』は、ジェンダーのアイデンティティは行為が営まれる中で（つまりペフォーマティブに）構築されるのであって、行為の前から存在すると考えられる主体によってジェンダー行為が営まれるわけではないと言う。フェミニズム政治の担い手を思考する中で、ベトラーは行為に先立つ主体を前提とする考え方を基盤主義^{ベース・イデオロギイ}とし、それに対して行為遡行性を指定している（Butler 1992）も参照。ジェンダーの「表出」（expressions）の背後にジェンダー・アイデンティティは存在せず、アイデンティティは、主体が引き起こす結果だと考えられる表出によって遡行的に構築されるものである（ベトラー一九九九：五八―五九）。

ここでいうジェンダーの「表出」は、表現あるいは行為と考えてよいものだ。このベトラーを受けて富山一郎は、行為者一般を確定することの不可能性を言う。「行為者に見えるものは、行為の後から構築された行為の起源であ

り、そうであるがゆえに、この起源である行為者は、行為により不断に攪乱されていくことになる」〔富山二〇〇：九六〕。この行為者は複数でもありえ、主語である複数の行為者は行為により不断に攪乱される。私たちというアイデンティティは遂行的に構築されるのであり、そのアイデンティティは行為を表す述語により不断に攪乱され続け、更には本章が明らかにするように、暴力の記憶の分有という述部行為によって既存の主体の境界を揺るがす。このように設定される「困難な私たち」は安易な結束や連帯ではなく、絶望を経由し使われる表現であるが、つながりをあきらめているのでもない。起源を推定し神話を作り、人びとを同質な存在に置き換えるのではない形で人びとがいかにつながることができるのか、そこから発見された考え方である。

田中雅一〔二〇〇二〕はベトラーを受けて、主体ではなくエイジェントからなる「パフォーマンス・アイデンティティのコミュニティ」の研究を志向し、上野千鶴子〔二〇〇五〕は、言説行為の反復という過程を通じて事後的に構築されるアイデンティティを、行為に先立つ主体と設定するのではなく、ベトラーの言うようにエイジェンシー（行為体）と呼ぶことを提起している。言語がエイジェンシーを通じて語るプロセスそのものがエイジェンシーであり、あるいは「言語が主体を通じて語る」媒体がエイジェンシーである〔上野二〇〇五：二五〕。同義反復のように見えるが、先験的に定義された主体が語り行為するということではなく、また（民族誌の）記述主体が「私たち」を事後的に構築する媒体と化すのである。

脱植民化を主題化する本章に言う「困難な私たち」とはこうしたエイジェントやエイジェンシーのことで、分断されている植民者と被植民者のかすかなつながりの可能性はここに希求される。また民族誌記述主体がエイジェンシーであるとなせる。以下では、自分たちとは何者かを問う「廻行」が引き起こす、植民された暴力の経験や記憶の想起と「困難な私たち」の結びつきを説明する。

（2）廻 行

エドワード・サイードが思考した「非西洋人による西洋への」(X) 廻行、つまり自分とは何者かを考え続ける廻行ということ、東アジアの植民的近代における「困難な私たち」に結びつけよう。ベツをつけるのは、それが非西洋と西洋を対置させる二分法的思考に基づいた表現であるからだ。西洋の覇権的な言説を相手にそこに分け入り、それらとまじりあう中でそれらを変容させ、これまで抑圧されたり忘れられたりした歴史を認めさせる営為をサイードは廻行 (voyage in) と呼び、それが「周辺」地域で多くの知識人たちにより行われてきたことに注意を促す〔サイード二〇〇一：四六〕（同書邦訳では「廻航」を使用）。ネイティビズムは起源を想定し、ナショナルで画一的な主体を立ち上げようとする考え方であるが、廻行はそれと一線を画す。

イギリス植民地であつたトリニダード・トベゴ生まれの知識人、C・L・R・ジェイムズ（一九〇一—一九八九）は自分たちの「非ヨーロッパ的ルーツ」について以下のように述べている。

「非西洋か、西洋かという問いかけがあれこれかというかたちで提出されるのを好みません。そうかんたんに割り切れないと思うからです。わたしはどちらもと考えています」〔サイード二〇〇一：九九—一〇〇〕（強調は原文。「」内は引用者補足。以下同様）。

単なる対抗とは異なるこうした廻行は、周辺域における反帝国主義抵抗運動と、欧米の内部における抵抗文化とのあいだに「文化的連合の基礎となるもの」を提供する〔サイード二〇〇一：二二〇—二二二〕。帝国日本の内部の抵抗文化と東アジア（旧）植民地における脱植民的な抵抗運動のあいだのそのような連帯は、「困難な私たち」において再浮上している。更に本章は到来する暴力の記憶に注目し、サイードの注目するような知識人だけが廻行を行っているという訳ではなく、知識人と呼ばれていない人びとにあっても、それに近い行為が植民的関係の克服にあ

って行われていることに注目する。知識人と呼ばれない人びとは記述をし続ける中で思考を深めることは少ないかもしれないが、到来する記憶を生活のさまざまな場面で立ち止まって考え口にするとは、廻行に限りなく近いと言える。

主体に作動する暴力と切り離すことのできない廻行は、絶えず解体し続ける主体（上に見たエイジェンシー）の運動・プロセスである。植民地統治の影響はトラウマ記憶のように事後的に理解される可能性を持ち、植民地統治の影響を受けて自己形成してきた者達とは何かということ思考する（廻行する）ことは、偶然性を含む歴史化（意味化）しきれない出来事を継続して思考することである（富山 一九九六）。歴史化しきれない出来事とは植民地支配の痕跡でもあり、本章においてそれはトラウマ経験とその記憶である。それは歴史化されない傷であり暴力の痕跡である。自分とは何か、われわれとは何かという問いには、経験した過去を言説化することによってその答えは曖昧ながらも登場し、そこにトラウマ経験が存在する場合、到来する記憶となってやってくるその経験に向かい合い言説化することは、危機的かつ重要な契機だ。また主体がたえず解体され続ける廻行の中で行われる流用とは、自由な主体が道具を自由に使用するような戦略的なものであると同時に、模倣しなければならないという反復強迫的なものである（富山 一九九六：九五）。それは不意に到来してしまふ暴力の記憶においても同様である。廻行は異種複性を尊重するようなものではなく、自分の過去が呼び起こされ既存の主体の変容をもたらさずにはいられない、時に痛みを伴った運動である。

サイドの廻行と、バトラーを受けた富山の「困難な私たち」は、私たちとは誰が、何かという台湾先住民族の自治をめぐる葛藤、そして植民されてきた過去の記憶の到来にあつて、言葉と記述を介して結びつく。その記憶の分有が、新たな私たちをタイヤルと日本の間に分有という行為の遂行的な結果として生み出し続け、そのプロセスが「困難な私たち」への廻行となり、民族誌はその場を提供する。

岡真理「二〇〇〇」は、人が主体的に支配し想起することのできない、暴力的トラウマ的記憶と出来事が、語られ分有（partage）される事態について述べている。そうした記憶と出来事は人に到来するものであり、それを見聞きする（又聞きする）者は、無能さと受動性において記憶と出来事を受け取り、分有してしまう（中村 二〇一一）を参照。困難な私たちへの廻行とはここで、植民状況における相互関係の記憶が想起される中で、自分たちとは何かという問いに答えを求め続ける、既存の主体を解体する暴力を内在する行為である。

2 コンタクト・ゾーンに到来する記憶と応答責任

困難な私たちは、M・L・プラットのいうコンタクト・ゾーンにおいて出会い、生成する。読者が被植民の経験の記憶に民族誌記述を通して出会う場もまた、コンタクト・ゾーンであることに留意されたい。プラットはコンタクト・ゾーンを、地理的・歴史的に断絶した複数の主体が空間的時間的に共にあることを喚起する試みとし、これらの主体がお互いの関係性の中で相互に構築されていることを強調する。植民者と被植民者の関係は、「力の配分が極度に非対称的であるような関係」における同時存在や、相互にからみ合った自他の認識や実践的關係から考察される（Pratt 1992: 67、訳文は「チェン 一九九六：三五三」を参考にした）。

地理的・歴史的に切り離された複数の主体が前提とされている点は批判的考察を要するであろうが、非対称的な権力関係にある植民状況の中で主体が形成されていくという視角は、本書が受け継ぐものである。ここでは更にコンタクト・ゾーンにおいて到来する暴力の記憶を、記憶の強迫的な流用（appropriation）と考え、それを聞き・書く行為を意識化したい。暴力を含んだ過去の流用について、マイケル・タウシグ「Tausig 1986」は過去が現在を専有する（appropriate）事態と重ね合わせて考察していた（石原 二〇〇二）。過去や記憶の強迫的な流用とは、記憶が

現在の私たちを専有することをも意味し、ここでコンタクト・ゾーンは記憶が到来する緊張感ある磁場と化す。終わったこととして了解された鎮圧状態を再度喚起する、暴力の記憶を描くコンタクト・ゾーンの民族誌が書かれ読まれること自体が新しい政治であり、別の未来を再構成する契機なのである（『雪山 二〇〇五』を参照）。

台湾先住民族タイヤルに対しての実質的な植民地統治は、武装した日本軍警によるタイヤルとの戦争と武装解除、それに続く占領という形で始まっている（『中村 二〇〇三』）。日本人である私は、台湾先住民族とくに日本統治期に生まれた人たちにとり、植民された記憶を想起させてしまう媒体である。私という日本人を媒介として、暴力の記憶が、暴力的にタイヤルの人びとに到来する事態を書きそれが読まれることが、タイヤルと日本がつながる可能性をかすかに開く。

本章におけるコンタクト・ゾーン概念は三つの場面を想定している。まず、植民地統治下において、日本とタイヤルが出会い、お互いを日本／タイヤルと認識し、そうした存在として相互が形成される場面。次に、私がタイヤルの人たちと出会う場面。最後に、私が上の二つの場面を描き、それが今、読者に読まれているという場面。暴力の記憶の民族誌記述とは、この三場面が凝縮され重なり合う場である。日常に到来する暴力の記憶を聞き書きし、それを描く民族誌記述が読者に読まれる場面においてつまりコンタクト・ゾーンが登場する場面で、暴力の記憶は分有されるのだ。

ところで過去の植民地統治者である日本人が台湾で聞き書きを行うことは、植民地統治についての価値判断的磁場に置かれることになり、それは否応なしに、現在顕在化している植民（地）統治責任あるいは植民地支配責任の問題に節合される。「戦後」三〇年近く経って生まれた私のような戦後世代の日本国籍所有者にとって、応答責任（responsibility）は、日本政府の責任を国民として追求することと同時に、ある者にとっての記憶の到来がそれを聞く者にいやおうなく分有され、そしてそれを民族誌記述として書き、読まれることの中で（つまり生成するコンタク

ト・ゾーンの中で）取られていくものである。応答責任あるいは応答可能性は、レスポンジビリティの訳語として導入された概念であり、「レスポンシブル」は「応答をなしうる」と考えられる。日本軍「慰安婦」問題を中心に、一九九〇年代に日本がアジアの戦争被害者から強く直接に戦後補償を求められるようになり、戦争・戦後責任論争が強度を増して再燃した（戦争と植民地統治責任を問う声の系譜についてここでは詳論を避ける）。応答責任とは、他者からの呼びかけや訴えがあったとき、その呼びかけに応えるか応えないかの選択を迫られる磁場に置かれることを指し、日本人と日本社会はその対応をめぐる緊張状況にある。他者からの呼びかけへの応答は、人間関係を作り出し、維持し、新たに作り直す行為であり、他者との基本的な信頼関係を確認する行為であると設定しておきたい（『徐・高橋 二〇〇〇：九〇―九三』）。

近年の責任をめぐる論議が過去における日本の戦争責任論と異なるのは、B・アンダーソン『想像の共同体』（一九八三年出版、邦訳は一九八七年）などに代表される、国民国家論あるいはナショナリズム批判を踏まえての責任論であるということだ。つまり、責任を取る際のナショナルな主体の立ち上がり方、あるいはそれをどう語りうるのが問題となっており、国民＝民族責任と個としての責任の、両者の関係とその腑分けが課題なのだ。

トーマス・キーナン [Keenan 1997] は倫理性と政治性についてこう述べている。倫理や政治は主体やエイジェンシー、アイデンティティなどの概念の優越性に行為の基盤の根拠を求めようとする時、逆に消滅してしまうものであり、こうした行為の基盤を取り除くことにおいてのみ倫理性は出現する。私たちが何をすべきか知らずどうしたらいいかわからない時、あるいは私たちの行為の影響や状況といったものがはつきりと計算できない時、そして私たちがどこにも（自分自身にすら）振り返り立ち戻ることができないその時に、レスポンジビリティに出会う。キーナンの言う倫理性は岡眞理が述べる、受動性において暴力の記憶と出来事を受け取ってしまう事態に近く、先に見た、行為と述部から主語を捉え返していく「困難な私たち」への廻行に重なり合う。コンタクト・ゾーンにおけ

る暴力の記憶の民族誌はこうした事態に敏感であるだろう。また責任は倫理的・道徳的責任と政治的責任に切り分けられないだろう。責任を取りきることができないがゆえにその重さに耐えかね、政治的責任あるいは金銭的解決(補償)をもって問題が終わったとすることはできない。

応答責任の取り方には非言語的な行為も含まれるが、ここでは民族誌記述という言語行為における応答責任の可能性を日本と台湾・台湾先住民族のコンテクストにおいて追究する。以下、日本の台湾先住民族に対する植民地統治と、中華民国の台湾先住民族に対する植民的政策、それらの中から生まれてきた自治と脱植民化をめぐる動きをみる。多くの日本語読者にとりこがれたコンテクストは必ずしも自明のものではないと思われるが、日本植民地統治の責任は台湾先住民族の政治家や民族運動家、知識人によりなされる政治と、民衆の日常生活において議題にあがっている。

3 台湾先住民族の自治と「私たち」の脱植民化の課題

二〇一一年現在、台湾(中華民国)と中華人民共和国の関係が議題になっているが、台湾政府に一四民族が公認されている台湾先住民族⁽¹⁾の自治が同時に課題になっている。先住民族人口は二〇一一年、約四九万人、台湾人口の二パーセントのマイノリティである。八〇年代の戒厳令解除と民主化運動を自ら推し進める中で、台湾先住民族は中国語で言うところの「原住民族」のアイデンティティと政治参加をマジョリティ社会に承認させる運動を行ってきた(石垣二〇一・笠原二〇〇四・山本ほか編二〇〇四)等を参照。それは、この百数十年間の近代国家の侵入によって阻害されてきた自治を取り戻さんとする「脱植民化」(decolonization)の運動であり、脱植民化(中国語では去殖民)は現在、その内実が問われながら台湾先住民族の中で議題化されている(中村平二〇〇九)。

台湾先住民族である孫大川(二〇〇〇)は、集落意識から汎先住民族意識が形成された背景のひとつに、「私とは誰か」「私たちとは誰か」という自らに突き刺さる問いの力を指摘している。「原住民族」の正式名称獲得運動では、自分たちの名を自分たちで決め、名乗るということが重要であった。「原住民族委員会」の前委員であった以撒克・阿復は、先住民族の自治とは、脱植民化のたたかいというコンテクストにおける、先住民族の自決権の、政治的な実践であり自己管理あるいは自己統治(self-governance)であるとする(以撒克・阿復二〇〇五)。

近代的な植民主義(コロニアリズム)概念は、軍事力あるいは暴力を背景に、他者を自己決定や自己発展の主体と見なさず、教導あるいは開発されるべき存在と見なし支配し、自己をその逆の存在、つまり理性的、文明的、生産的なものとして確立する力の動きを指す。その支配は国家と資本とジェンダー的差異の磁場⁽²⁾にあり、自他の区別は国家の制定する法により確定され実体化する。そうした植民主義にあらがう動き(抵抗)と、圧倒的な植民主義の磁場にありながらそれに対してさまざまな交渉を行う動き(廻行)を、ここで脱植民化として想定している。コロニアリズムの訳として「植民地主義」もあるが、本章は中国語の「殖民主義」⁽³⁾という語を鑑み、またコロニアリズムを植民地のみの問題としてだけでなく植民側の問題でもあることを喚起する意味で「植民主義」の訳語を採用する。そのことにより、植民側を射程に入れた「脱植民化」という言葉を使用することが可能となる(中村平二〇〇九・武藤二〇一〇)も参照。更に「植民主義」の用語は、公式の植民地とは通常見なされていない中華民国体制の下での先住民族に対する支配体制を指す、さしあたりの用語として「植民地主義」よりも適切である(以降、日本植民地時代のみを指す場合は「植民地」を使用する)。

台湾北部山地のタイヤルの歴史経験においては、植民主義が経済・政治的基盤の「発展」をもたらしたという言述は、その背後の国家暴力の考察の必要性と不可分の関係にある。タイヤルたちは、タウシグ[Taussig 1992]の言葉を借りれば黙らされてきたのだ。総督府の残した資料を通して語られるタイヤルの声は、暴力のもとで黙らされ

てきた歴史において検証されるはずである。台湾高地におけるこの日本植民主義の暴力に関して、日本人の立場からは近年、北村嘉恵〔二〇〇八〕や松田京子〔二〇〇五〕、中村勝〔二〇〇三、二〇〇九〕などが実証的に検証を進めており、本章もそれらの成果の上に立つものである。

傅瑛貽〔二〇〇六〕は一九三〇年の霧社事件や「旧慣打破」政策、「皇民化」と軍事動員など、日本植民地時代における台湾先住民族の「主体的」な抵抗を代理記述し、「植民地被支配の克服」としての「脱植民地化」が課題だとしている。自らの主体位置を分析することなく他者の主体性を代理表象するその論に対して、本章は、傅瑛貽の重視する「植民地化とそれに対する抵抗」にとどまらない感情的側面とせめぎ合う潜勢力、現在に到来する暴力の記憶を前景化し、私自身が「植民者日本人」へと遡行するところ、つまり前述の「困難な私たち」に応答責任を遂行的に設定する試みをより強く推し進める。別の言葉で述べれば、武力抵抗にのみ台湾先住民族の主体性を見出すのではなく、「日本人とは何者か」という問いを遡行する中で到来する暴力の記憶が、現在切り開く新しい政治に注目していく。武力抵抗しなかった先住民族の主体性は植民（地）統治に同化されてしまったとする歴史記述が、存在する潜勢力を捉え損ねるものでないか注意するべきである。

さて二〇〇三年六月には、民族自治区の設立に関わる「原住民族自治区法」草案が行政院から立法院に送られ審議され、二〇一一年八月にも民族議会設立を含めた「原住民族自治法」草案が審議されたが、反対もあり成立には至っていない。この間の二〇〇五年一月には、先住民族の権益に関して概括的保障を定めた「原住民族基本法」が立法化された（邦訳は「石屋 二〇一」）。こうした中、台湾先住民族の自治をめぐる論議は中央、地方のさまざまなレベルで行われている。二〇〇〇年以降首都台北において、「原住民族正名」や「原住民族重大歴史事件」、「台湾原住民族自治」、一九三〇年決起の霧社事件（七〇・八〇周年）などに関するシンポジウムが頻繁に開催され、関連する著作が多く出版されている。

民族議会設立は現政府の法的裏づけを未だ獲得しえず、またすべての先住各民族にあって同様の強度で進められているわけではないが、民族自治は陳水扁前總統（二〇〇〇―二〇〇八年在任）の自治を保障するという公約を背景に、台湾先住民族運動の重要な一環として位置づけられてきた。タイヤルに開関するシンポジウムとしては、「二〇〇二・二〇〇三・二〇〇四相互交流・タイヤル民族文化交響」（二〇〇〇年七月花蓮）、「タイヤル民族エスニックグループ意識の構築とアイデンティティ、分裂」（二〇〇二年二月台北）や、台湾・カナダ先住民族土地と自治に関する交流活動（二〇〇五年一月スマックス集落）などが挙げられる。中央と地方におけるこうした活発なシンポジウムがその議論の内容としているものは、歴史的な事件の解明と、自治と主体性の問題、自分たちとは何か、民族の歴史をどのように捉えるかという問題である。台湾先住民族の自治と歴史をめぐる動きは、自分に関することは自分で決定するという自己決定権の希求として理解される。私たちとは何かという遡行が行われている。

4 タイヤルの人びとにより想起され語られる暴力の記憶と歴史

一九九六年から五年間を台湾で過ごした私は、タイヤルの人びとと出会う中で、さまざまな記憶と語りあるいは直截に植民主義的な（コロニアルな）現実に出会ってきた。台湾北部の山間部におけるタイヤルのエベン集落とその周辺において、以下のような語りや記憶に出会ってきた。一九一〇年の日本軍警との戦い〔中村二〇〇三a〕。戦士ヘカオ・ヤエツツの戦死。伝統的政治リーダー・「マラホー」の、官製「頭目」への換骨奪胎〔中村二〇〇三b〕。「日本の侵略」。武装解除。日本警察と「テイクコクジュギ」の敵しさ。「蕃童教育所」での日本教育。日本が教えてくれた水田耕作。薬や教育や、道路をつくってくれた「天皇陛下」に対する「御恩」。日本のために南方に赴き戦った「高砂義勇隊」。米軍の空襲。日本人が「教えてくれた」歌〔中村二〇〇三c〕。

「大東亜戦争」の敗戦後の、中国国民党の統治。中国式の名前。日本時代「公医」となったタイヤルのエリート、ロシン・ワタン等の銃殺〔中村二〇〇六〕、多くのタイヤルエリートの入獄。中国共産党軍との、金門島などでの戦闘。ダム建設による半ば強制的な移住。「土地返還」を求めるデモ。「平地」での建設現場や工場の仕事。漢民族の差別的な眼差し。法に抵触する狩猟や魚とり。性産業への従事（黄二〇〇〇）も参照。台風や災害と開発行為の関連。砂防ダムの環境破壊。この暴力の記憶と呼びうるもの（しかし必ずしもそれにとどまらないもの）について、本章では次節において、高地の集落で起こった日本統治終了間際の出来事とその記憶を取り上げたい。

タイヤル民族議会の第二期議長である、マサ・トフイ（Masa Tohei 一九三三年生）は民族の歴史を語る。私は二〇〇四年から翌年にかけて台湾の中央研究院民族学研究所で訪問研究員をしていた際に、研究の報告を求められ、「桃園県を主としたタイヤル（民族）と植民主義、国家暴力」と題した報告を行った。帝国日本と中華民国の二度にわたる植民政策においてタイヤルは暴力にさらされ続け、殺された人びとがあり、中央と地方、また各宗派や各家庭のそれぞれに異なった状況の中で、自治の困難な課題を抱えていると述べた。その質疑応答の中でエタス・マサは、私の報告の半分近くの長い時間をかけ、国家政策によりタイヤルの土地は奪われ、経済的な苦境にあること、タイヤルが昔から自分たちなりの政治制度、そして「国土」を持っていたことを中国語で漢民族聴衆に訴えた。「エタス」はタイヤル語で「おじいさん」という意味の尊称である。エタスはまた、「中台が緊張関係にある中で、アメリカは、タイヤルが自治を主張することに対して大きく文句はつけないはずだ」ということも私との会話で述べた。台湾先住民族が自治を主張することは、中華人民共和国と台湾（中華民国）の緊張関係、それをとりまく日本、アメリカ合衆国の国際関係を思考せざるを得ない。

高金素梅（タイヤル名 吉達斯・阿蘭）は、母方がタイヤル、父方が外省系の出身であり、成人後先住民族の身分を取得し先住民族枠で立法委員に当選し、日本と中華人民共和国を射程に含めた政治活動を行っている。靖国神社に、

「日本軍に侵略されてきた、外省住民の在臺の返還を求める運動を起こし、大阪高裁に日本国と小泉首相、靖国神社に損害賠償を求めた訴訟では原告団長を務めた〔中村二〇〇八〕。瓦歷斯・諾幹は台中県で小学校教師をしながら執筆と震災復興活動を行っている。黒帝・巴彦は「故郷研究工作室」を立ち上げ、フィールドワークをしながらタイヤル文化の再建に取り組む。麗依京・尤瑪は「台湾原住民族部落連盟」を新竹県で立ち上げ、研究と自治促進の運動を行っている。タイヤルの伝統的な機織を復興させ、活動する女性の方々をあちこちで目にする（燃蘭・多文二〇〇四）を参照。一方、先住民女性に対する家庭内暴力はフィールドワークにおいてもしばしば耳にし、いわゆる外省人とパイワン民族の両親を持ち、タイヤルの前夫を持った利格拉桑・阿媽〔一九九八〕により取り上げられてもきた。多くの女性にとり自治とはまずもって、家庭内そして集落内での女性の自己決定、その意味での自治を指すと言える（中村平二〇〇九）を参照。

こうしたさまざまな動きがタイヤルにおいて必ずしも直接手を取り合う形ではないが、隣合って存在している。このようなタイヤルの重層的自治をめぐる困難な状況にあって私は聞き書きを行ってきたのだが、日本人である私の登場はタイヤルの人びとに日本の植民地統治経験を喚起させ、さまざまな感情や記憶を引き起こしてしまう。自らの立場性に注意しながらコンタクト・ゾーンにおいて生起するこうした事態を書くということは、到来する植民地経験の過去についての記憶の分有を意識し、またタイヤルと日本の、さらにその周囲の人びとをつなぐ「困難な私たち」への遡行となる。自らが記述に織り込まれるということは、自称する者として歴史や文化を語ることであり、記述が自己言及的になる中で「私たち」が生成し続ける。さらに読者に分有された記憶が、定義され確固とした基盤を持たない「私たち」をその都度生む。民族誌の記述が読者に読まれる中で、「私たち」は新しく織り直されていくことになる。

5 ヤキ・ピスイが私に語る記憶

この小節では、二〇〇五年五月に台湾の桃園県復興郷エヘン集落で聞いた、終戦時の日本人に関わる話を紹介する。日本植民暴力の記憶が語られる現場において、「日本人がタイヤル人に」話を聞くという民族主体的構図は強く登場するが、それにとどまらない関係性が同時に登場しており、そのような「私たち」が生起する場としてコンタクト・ゾーン概念を捉えることができる。

私は二〇〇四年の一〇月末に台湾を約一年の滞在目的で再訪し、首都台北とエヘンを往復していた。エヘン集落は三〇戸人口四百人ほどの集落。台北からは車を飛ばせば三時間程度かかり、公共の交通機関では半日の行程である。台風後は、土砂崩れによりしばしば道が分断される山地である。エヘン集落の周辺はタイヤル語で「ゴーガン」と伝統的に呼ばれる地域であり、行政的には桃園県復興郷の三光村にある。日本時代末期には新竹州大溪郡に区分されていた。「ゴーガン」は日本語で「ガオガン」とされ、エヘン集落一帯を植民地政府は「ガオガン蕃」と呼んだ。郷の名称である「復興」は、中華民国が中国全土を回復するための「復興の地」台湾という由来を持っている。一九四五年の日本敗戦の後、台湾は中華民国に接収され、地名も人名も中国式的ものに変更させられてきた。

私はエヘン集落において、日本教育を受けた人たちの話の聞き書きを一九九九年から行っている。日本の植民地統治と戦争責任に関心を持っていた私は父の勧めもあり大学卒業後台湾に渡り、台湾の大学院の修士課程に入学し日本統治時代について人類学的研究を始めた。初めてタイヤルの集落を訪れたのは一九九六年のことで、父の紹介を受けてのことだった。父はその数年前より台湾高地先住民族に関する歴史人類学的研究を始めており「中村勝二〇〇三」、エヘン集落には父の息子ということで赴いた。山地集落においては「日本人が来た」とすぐに知れ渡り、

日本語のできる高齢者をしばしば紹介していただけて、私は聞き書きを容易に行うことのできる立場にあった。

二〇〇五年五月のある日、ヤキ・ピスイとエタス・ユミンに、日本時代のことを聞きにお邪魔しに行った（両方とも仮名）。ふたりとも七〇代半ばで、日本教育を受けた世代。「ヤキ」は「おばあさん」という意味である。ヤキ・ピスイは数年前からひざを悪くして、毎日家のリビングルームのソファでテレビを見ながら休んでいる。「エタス」は「おじいさん」という意味で、エタス・ユミンは身体のあちこちに悪いところが出てきてはいるが、ゆっくり農作業ができるほどには元気である。ヤキ、エタスともに日本語が堪能で、それは日本植民地時代に学校教育や軍事動員において培われたものである。ヤキの出身は山道を五キロほど離れたマリコワン集落（現新竹県尖石郷玉峰）で、エヘンには嫁いできた。ヤキの父親は、マリコワン集落で警察の下働き（警手）をしていた人物であり、日本人との付き合いがよかったという。

エタスに戦時動員のことを聞いているとき、ヤキは日本時代のこと、特に「大東亜戦争」終戦直前の日のことに話題を変えた。私とエタス・ヤキの会話は、ほとんどいつも日本語でしている。あるまとまりをもった話だなと私は察知し、ノートを取り始めた。

ヤキ・ピスイ：「マリコワンの」学校でね、朝会してたとき、何百台の飛行機がならんで新竹の方に行ったよ。先生はずっと立って見てる。

エタス・ユミン：あれはB29と言う。あの時^{ちやうど}中壢^{ちやうど}（桃園県平地の都市）に一週間、講習に行ってた。

エタスはその時、ベロン^{ベロン}（現上巴陵）の監視所で毎日、米軍の飛行機を見ていたという。ベロンはもともと、日本軍警がエヘン周辺のタイヤル集落を投降させるため、また「帰順」後の治安を維持するため、一九一〇年に砲台を据えつけた場所である【猪口編一九二二（一九八九）：六三八―六四〇】。

ヤキ：「采軍の飛行機は」高い山過ぎしたら「過ぎたら」、ペンペンとタマ落としている。それでも日本の先生はこわくないよ。ずーと、百何名「生徒が」運動場で立ってる。そのときボーケーヨー「防空壕」を掘っていた。でも深くないでしょ。撃たれたらダメよ。飛行機は飛行場を狙ってるから山には落とさなかったけど、今考えたら危ないよ。「日本人の」コラテ (Korate) 先生、あの先生ダメよ。八月一五日の夜はお盆祭り。「八月一五日は実は日本が」降服したでしょ。集まってお酒飲んだ。コラテ先生が「突然」鉄砲を撃ったよ。父さんの腕、撃たれて、別の人の腿にも当たった。何にもけんかもしてないのに、「コラテ先生は突然」撃ったの。山地の人が集まって、酒飲んだ。私の組の人たち。ひとりのおじいさんが怒って、やり返そうとしたけど、やめた。おじいさんの名前？ シラン・シャッ。どうしてやめたかって？ あの時、自分の子が義勇隊「高砂義勇隊」に行つて、日本人が帰らさないかと思って、やめたの。その子の名前は、ヤブ・シラン。しかしあとで子供も帰つてこなくて、やっておけばよかったと、「シランは」部落の人に話したよ。

コラテ先生とは、おそらく日本名で「コダテ」である。タイヤル語には [d] (有歯歯茎破裂音) の音がないので、近い [t] (歯茎ふるえ音) の音で代替しているようである (二〇〇五年公布の「原住民族語言書寫系統」も参照)。台湾先住民族に対する教育は一般に、「蕃童教育所」と呼ばれた学校において警察が教育を担当していた (北村二〇〇八) を参照。「子供も帰ってこなくて」というのは、戦争で亡くなったことを指す。第二次大戦の台湾先住民族に対する軍事動員は、一九四一年から特別志願兵、高砂義勇隊として始まっていた。彼らは志願し、また志願しなければならぬ状況に追い込まれ、フィリピンやバプア・ニューギニアなどの「南方」戦線で日本のために戦う (近藤一九九六：三八七―三九七)。「やっておけばよかった」という箇所は、「殺っておけば」と表記するべきだろうか。

ヤキ：腿に当たった人は、ユミン・アタオ。大溪^{だいけい}に運ばれて、弾を取ったけど死んだ。私の父の名前はレサ・

バトウ。みんなそのとき怒って、日本人を帰らさないと言った。コラテ先生は、大溪から警部が来て、夜連れていった「連れていかれた」。「警察たちは」電燈を持ってきた。昔は夜歩くことは珍しかったの。コラテ先生は、日本に帰らしていない「帰っていない」。銃殺されたい。九州の人だったわね。私の先生、日本の警察よ。それでも撃った。

大溪は、エベンからずっと山道を下って着く、現桃園県平地の都市。ユミン・アタオの孫は、今でも玉峰に住んでいるという。ユミン・アタオの子供は、ヤキ・ピスイの同級生。コラテ先生はおそらく敗戦の混乱の中、日本の警察によって処刑されたのであろう。

ヤキ：「事件の次の日」戦争終わったでしょ。日本は負けた。父さんは剣道とてもうまい。そのために、コラテ先生が具合悪く思ったかもしれない。あの時、運動会は何でも競争する。おどり、走り……。剣道するとき、父は「マリコワンの代表になって勝った。カウイラン社 (Kawilan、現桃園県復興郷高義) のひと負けた。お盆祭りの時、マリコワン社の人、みんな集まってかんずめとかお菓子を食べてる。私はうちにいたの。お父さんは左腕、やられた。大きく怪我した。

お父さんは、大溪で治療を受けたという。

ヤキ：私が大溪に行つて、お父さんを守った。一四歳だった。私のお父さん、「警察に」何回も呼ばれた。でも行かないでしょ。こわいでしょ。私の親類のひとみんな分かってる。「コラテ先生の行為は」何のための原因が分からない。お父さんの兄さん、「何が、どうして撃つか」と、弓持って行つて撃つよと言って、行つた。シラン・シャッだけが止めた。「事件の日の夜」派出所にはひとつのろうそくが、窓に入ってる「映っていた」。

ヤキ：翌日朝、「日本人」もおらん。角板（山）「現復興郷復興」から「警察」来たかも、何十名来た。皆朝までいた。「朝には」日本の警察ひとりもおらん。山地の人短気でしょ。「戦争は」その日かその翌日か、降服したでしょ。その前に「日本が降服すると」分かっていたら、必ず死なしたはず。私「看病のために」何か月くらいおったかね、大溪に。日本のお医者さん、台北の帝大病院が疎開して来ていた。中国人がお父さんに「詳細を」尋ねる。こわいよ。行かないよ。

終戦の前日あたり、五〇年間に及んだ日本の植民地統治が終わろうとしたその間に、日本人警察「コラテ」先生に撃たれて殺されたタイヤル人、ユミン・アタオ。同じく撃たれて大怪我をさせられた、ヤキの父レサ・ベトウ。日本（警察）に対する一触即発の潜勢力。そして、それをヤキが私に日本語で語ってくれる。それを語ってくれたのは互いに知り合って数年たち、半ば顔なじみになった時であつたのであり、それ自体が、すぐには話せない内容だったことを推測させる。

ヤキ・ビスイはこの記憶を、なぜ私に語るのだろう。私が歴史を研究する日本人の学徒だから？。未来にむけて、日本とタイヤルの歴史の共有と和解のために？。日本人に出会って日本語を用いて話をする際、植民（地）の過去が反復強迫的にタイヤルとヤキを襲うから？。そのどれもが正しく、どれもが何かを語りきっていないが、本章はさしあたりこの記憶を脱植民化の場に置きながら描き出している。

この記憶、この歴史は、第三節で見たタイヤルや他の先住民の知識人や政治家が、現在取り組んでいる自治や脱植民化の動きあるいは「私たちの歴史」の語り直しの、そばにある。抵抗の民族主体を立ち上げる際に、タイヤルの起源を推定し、ナショナルな主体形成の力のベクトルが働いていることは否定できない。その民族主体の歴史は、上のような断片的な記憶が話されることにおいて、強化もされるし、ずらされる（記憶の換喩的ずらされに

いては、「磯田二〇〇六」を参照）。ヤキ・ビスイの話は「日本帝国主義・植民地主義粉碎！」という大きな（民族）政治でのスローガンとは語り口が違ふ。だからこそこの話を聞いた、植民者の末裔である日本人は、複雑な思いを抱くことになるだろう。その記憶を図らずも受け取ってしまうだろう。日本人にとっての他者の記憶が今まさに読まれること、それは他者と出会ってしまうという意味で、脱植民化の磁場が浮き上がるコンタクト・ゾーンにあることに他ならない。民族誌記述が読まれることが、コンタクト・ゾーンを生みなおしている。

ヤキ・ビスイはこの記憶を、タイヤルとして、日本人としての私に語ってくれたのか？。そうとも言えるし、タイヤル／日本という二主体の関係だけにこの話が回収される訳でもない。ヤキと私という個がそれまでになしてきた関係は、一枚板のタイヤルと日本の両者が出会うという関係にとどまらないものだからである。コンタクト・ゾーンにおける暴力の記憶の分有は、タイヤル／日本という二主体や二つの個の間になされるのではなく、読者を巻き込みつつなされる記憶の分有により、それらの二分法を越えた「困難な私たち」が生まれている。本節のヤキ・ビスイの記憶の話を聞いてしまったからには、この話が心の片隅のどこかに刻まれてしまうことも確かである。暴力の記憶の到来は人を専有する暴力だからだ。その記憶の分有は脱植民化運動の始まりの契機であり、「困難な私たち」への逆行となっている。

この話は書かれ読まれることによって、読者のあなたに今送り届けられる。私は今この場で民族誌記述を通して語ることによって、私が聞いて体験したものをあなたに伝える。植民地統治の責任を取るということを、暴力の記憶を聞きそれを語りなおすという応答可能性の追求から、関係を作り直していく始まりの現象として考えていくはずである。

6 暴力の記憶の分有を通して「困難な私たち」への廻行を行う民族誌記述

台湾先住民族に対する日本と中華民国の二つの国家統治の記憶は、自治をめぐる脱植民の運動のそばにある。先住民族とは何か、私たちとは誰かという問いに答え続けることは、「困難な私たち」への廻行である。そうした廻行を記述することは、コンタクト・ゾーンにおける記憶の民族誌記述である。日本人である私が日本植民主義に関する民族誌記述を行うこと自体が、日本人とは何者か、私とは何かということへ向かつての自己言及的な廻行であり、台湾先住民族と日本人をつなぐ可能性を開く新しい「困難な私たち」への廻行となる。

植民(地)統治責任を取ることは、応答可能性を探ることとは、このような現場あるいは臨床と呼べるようなフィールドにおいて、遂行的に事件(出来事)として発生する。本章は「戦後」世代日本人の立場から、脱植民化つまり植民地統治に関する応答責任を、今記述し今読まれるという遂行的なプロセスにおいて取っていくという点に設定してきた。応答責任を「困難な私たち」への廻行に、日本語読者をいざなり点に設定してきた。このような民族誌の記述自身が、記憶の分有を通して困難な私たちへと廻行するのだ。植民統治への応答責任は、分有行為が生み出す、既存の主体を解体し続ける者たちが取り続けていく。責任は、ナショナルな主体が取りきれものではない。

追記

本章は二〇〇七年発行の『コンタクト・ゾーン』一巻掲載の拙稿を削除修正加筆したものである。また平成一六―一八年度文部科学省科学研究費補助金、中華民国中央研究院民族学研究所訪問研究員(二〇〇四―五年)による成果の一部である。

注

- (1) 「台湾先住民族」という名称をここで使用することにより、「中国(あるいは)中華の先住民族」、または「台湾(あるいは)中国の南島(オーストロネシア)民族」などの名称の可能性を排除してしまつてはならないだろう。本章はそのことを喚起した上で、「台湾先住民族」という言葉を暫時的に使用する。また「平埔族」と自称する人びとの中には、「原住民族」としての身分の公認を要求する運動を展開する人びとがある。
- (2) タイヤル民族議會は二〇〇〇年に正式に成立を宣言した「タイヤル(泰雅爾)民族議會 二〇〇五」。その他の民族においては、タオが二〇〇二年一月、蘭嶼ヤミ(タオ)民族議會を成立。サイシャット民族議會準備委員会は二〇〇五年八月、民族議會の設立を議論しており、新竹県においては二〇〇六年八月に県下の集落をまとめる「部落議會」を組織した。トウルク(タロコとも表記する)は二〇〇五年一月、トウルク民族自治推進委員會を成立し、二〇〇六年には「トウルク民族基本法」草案を起草した(トウルクはタイヤルから二〇〇三年に独立しひとつの民族と政府に認定された)。サオ民族議會は二〇〇五年二月に成立。ツォウは二〇〇六年二月、「原住民族ツォウ民族議會」の成立を決議している。ブエマは二〇〇六年六月、ブエマ民族第四回超集落會議を開き、ブエマ民族議會について討議した(「台湾原住民族電台新聞」等から筆者が整理)。

参考文献(台湾先住民名、中国語名の順序は日本語の発音に基づいた)

- 以撒克・阿復「二〇〇五」「台湾原住民族、認同與自治運動」與談稿(「台湾先住民、アイデンティティと自治運動」コメント原稿)
行政院原住民族委員會主催「原住民族正名」(先住民族正式名称)シンポジウム、八月二一―二四日、台北、一三ページ。
磯田和秀「二〇〇六」「エートピアの忘れ得なさ」大阪大学COEプログラム「インターフェイスの人文学」編『ポスト・エートピアの民族誌』同プログラム、二一―三〇ページ。
石垣直「二〇一」『現代台湾を生きる原住民族』風響社。
石原俊「二〇〇一」「移住者として生きるということ」『日本学報』(大阪大学)二〇:五七―七二。
猪口安喜編「一九二二(一九八九)」『理蕃誌稿』第三編、台北:台湾總督府警務局(青史社)。

上野千鶴子〔二〇〇五〕『脱アイデンティティの理論』上野千鶴子編『脱アイデンティティ』勁草書房、一一四―一四一ページ。

岡真理〔二〇〇〇〕『記憶／物語』岩波書店。

笠原政治〔二〇〇四〕『台湾の民主化と先住民』『文化人類学研究』五：三一一―四八。

北村嘉恵〔二〇〇八〕『日本植民地下の台湾先住民教育史』北海道大学出版会。

黄淑玲〔二〇〇〇〕「臺灣的“ngasal”」(臺灣中の“ngasal”)『台湾社会学研究』四：九七―一四四。

近藤正己〔一九九六〕『総力戦と台湾』刀水書房。

サイト、エドワード・W〔一九九八〕『文化と帝国主義Ⅰ』大橋洋一訳、みすず書房。

——〔二〇〇一〕『文化と帝国主義Ⅱ』大橋洋一訳、みすず書房。

徐京植・高橋哲哉〔二〇〇〇〕『断絶の世紀 証言の時代』岩波書店。

孫大川〔二〇〇〇〕『夾縫中の族群建構』(隙間の中でのエスニック・グループ形成)台北：聯合。

タイヤル(泰雅爾)民族議會〔二〇〇五〕『Biru Bkgan na Təpusal Mintxal Melahuey Qu Ginhoyal Pəpung Zyuawaw Tayal 泰雅爾民族議會第二屆第一次大會手冊』六月一日、於Sinkina Tayal Kyokay(台灣基督長老教會五分教會)、竹東。

田中雅一〔二〇〇二〕『主体からエージェントのコミュニティへ』田辺繁治・松田素二編『日常の実践のコミュニティ』世界思想社、三三七―三六〇ページ。

チウ、レイ〔一九九九〕『アフリミティグへの情熱』本橋哲也・吉原ゆかり訳、青土社。

屋山一郎〔一九九六〕『対抗と選行——フランク・ファノンの叙述をめぐる』『思想』八六六：九一―一三。

——〔二〇〇〇〕『困難な「わたし」——シニティス・ベトラ「ジェンダー・トラブル」』『思想』九一八：九一―一〇七。

——〔二〇〇二〕『暴力の予感——伊波普猷における危機の問題』岩波書店。

——〔二〇〇五〕『沖縄戦「後」ということ』歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座10 戦後日本論』東京大学出版会、二九一―三三四ページ。

中村平〔二〇〇三a〕『台湾高地・植民地侵略戦争をめぐる歴史の解釈』『日本学報』(大阪大学)二二：四五―六七。

——〔二〇〇三b〕『マラボイから頭目へ』『日本台湾学会報』五：六五―八六。

——〔二〇〇三c〕『雅基・比羅的故事(ヤキ・ビスイの物語)』ヤキ・ビスイ口述、中村平整理、李英茂訳『宜蘭文獻雜誌』六二：六七―一五四(中華民國宜蘭県立文化センター)。

——〔二〇〇六〕『ロシン・ワタンをめぐる史料紹介』『台湾原住民研究』一〇：一七―一九。

——〔二〇〇八〕『植民暴力の記憶と日本人の責任』『日本学報』(韓国日本学会)七七：二〇三―二二〇。

——〔二〇〇九〕『台湾先住民民族タイヤルをとりまく重層的脱植民化の課題』『日本学』(東国大学日本学研究所)二九：一五一―一九。

——〔二〇一一〕『受動的実践と分有』『日本学報』(韓国日本学会)八六：二九七―三二一。

中村勝〔二〇〇三〕『台湾高地先住民の歴史人類学——清朝・日帝初期統治政策の研究』緑蔭書房。

——〔二〇〇九〕『捕囚——植民國家台湾における主体的自然と社会的權力に関する歴史人類学』ハーベスト社。

ベトラ、シニティス〔一九九九〕『ジェンダー・トラブル』竹村和子訳、青土社。

傅瑛玲〔二〇〇六〕『台湾原住民族における植民地化と脱植民地化』倉沢愛子、杉原達、成田龍一、テッサ・モリス・スズキ、油井大三郎、吉田裕編『岩波講座アジア・太平洋戦争4 帝国の戦争経験』岩波書店、二六七―二九一ページ。

馬希・巴彦〔二〇〇二〕『泰雅人的生活形態探源——一個泰雅人的現身說法』(タイヤル人の生活形態の源流研究——カミングアウトした一人のタイヤル人による語り)新竹：新竹県文化局。

松田京子〔二〇〇五〕『一九三〇年代の台湾原住民族をめぐる統治実践と表象戦略』『日本史研究』五一〇：一五二―一八〇。

武藤一平〔二〇一〇〕『戦後日本と脱植民地化回避の仕組み』『季刊・トポス・プラン』五二：三三―四八。

山本春樹、ベスヤ・ボイツォス、黄智恵、下村作次郎編〔二〇〇四〕『台湾原住民族の現在』草風館。

悠蘭・多又〔二〇〇四〕『泰雅織影』(タイヤル織影)台北：稻郷。

利格・阿媽〔一九九八〕『穆莉淡 Melidan——部落手札』(ムリダン——集落親書)台北：女書文化事業。

麗依・尤瑪〔一九九六〕『傳承——走出控訴』(伝承——立ち上がり告発する)台北：原住民族史料研究社。

- 麗依京・大塚編 [一九九九] 『帰郷歴史真相——台湾原住民族 百年口述歴史』(歴史の真相への回帰——台湾先住民族百年のオーストラロストーリー) 台北: 原住民族史料研究社。
- Butler, Judith [1992] "Contingent Foundations: Feminism and the Question of 'Postmodernism.'" In Judith Butler and Joan W. Scott(ed.), *Feminists Theorize the Political*. London and N. Y.: Routledge, pp. 3-21.
- Keenan, Thomas [1997] *Fables of Responsibility: Aberrations and Predicaments in Ethics and Politics*. Stanford: Stanford University Press.
- Pratt, Mary Louise [1992] *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*. London and N. Y.: Routledge.
- Taussig, Michael [1986] *Shamanism, Colonialism, and the Wild Man: A Study in Terror and Healing*. Chicago and London: The University of Chicago Press.
- [1992] *The Nervous System*. N. Y.: Routledge.

第三章 「アメラジアンスクール・イン・オキナワ」に見る 多文化共生社会への挑戦と課題

エイムズ・クリストファー
エイムズ 唯子

はじめに

「アメラジアンスクール・イン・オキナワ」(以下アメラジアンスクールまたはスクール)は、米軍人と日本人(沖縄人)女性の間に生まれた子どもたちのために、五人の母親たちによって一九九八年に設立された。沖縄には、中国、薩摩、アメリカ、日本など、時には同時に複数の統治者や支配者の帝國的なまなざしが注がれてきた。多民族的背景を持つ子どもたちが通うこの民間教育施設は、アメリカの占領から脱却して一九七二年に本土復帰して以来、今日まで沖縄にまわりつく「帝國的なまなざし」[田中 二〇〇七]を振り払おうとする人びとの歴史を背景に持つ。米軍基地に対する否定的感情の強い沖縄では、米軍人を父親とする子どもたちを母親がひとりで育てることは、経済的にも精神的にも極めて困難であった。これらの家族が孤立化を深めたのは、沖縄の人びとが数世紀にわたって受け続けた「帝國的なまなざし」を内在化し、ウチに対して向けた結果であるということもできる。沖縄大学名誉教授の新崎盛暉[二〇〇〇]は、沖縄の人びとがアメラジアンに対して蔑視的なまなざしを向けがちであることについて、「沖縄の盲点」であると鋭く指摘している。「広大な軍事基地を抱えてきた長い歴史ゆえに、沖縄の人びとの心